

## 第五章 交通と通信

### 第一節 近世の交通

#### 一 豊前国の一里塚と道絵図

##### 一里塚

近世の街道を往来する旅人にとって、「一里塚」は、旅程の目安となり、賃銭支払いの目安となり、日差しの強い日には木陰の憩いの場ともなった。

慶長九年（一六〇四）、徳川秀忠は、江戸日本橋を起点として、五街道のうち、東海道・東山道・北陸道の道路の両側に榎を植えた一里塚を築かせた。その後、公領は代官、私領は領主に命じて、あとの二街道（中山道・甲州街道）と脇街道に一里塚を築造させた。

では、豊前細川藩では、いつ、領内に一里塚が築かれたのであろうか。

寛永三年（一六二六）三月三日付の、中津の細川三斎<sup>さんさい</sup>付き奉行衆長舟十右衛門から本藩小倉の奉行衆浅山・西郡・横山の三人にあてた書状（「中津御奉行衆より参書状写」熊本大学付属図書館所蔵・永青文庫）に、

御状拝見せしめ候。御国中道ののり遠近御座候に付、一里三十六町道に成られ、一里目の境に桜を植申すべき旨仰せ出され候。中津近所も道ののり御打せ成られ候間、自然<sup>じねん</sup>御尋も御座候はば、右の通申上べく候。（後略）

とある。すなわち、豊前細川領では、寛永三年に、細川忠利<sup>ただとし</sup>（忠興の三男）が支配する本藩小倉領と細川三斎（忠興）の中津隠居領（蔵入地）をも含めて、三六町（約四<sup>きょ</sup>）ごとに一里塚を築き、桜を植えたのである。

一里塚築造の普請は、三月（旧暦）の農繁期であったので、農民以外のものが本藩小倉領と三斎隠居領とを合わせて行った。

このようにして、豊前細川領では、小倉城下を起点に領内に一里塚が次々と築かれていった。

#### 正保の国絵図

江戸幕府は、慶長・正保・元禄・天保の四度、諸国の「郷帳」とともに、「国絵図」を作成させ、幕府勘定所に提出させた。

豊前の「国絵図」は、正保図の転写本が国立公文書館内閣文庫に、元禄図の控えが福岡県立豊津高校小笠原文庫と島原市公民館松平文庫に、天保図の原本二舗（重複本）が国立公文書館内庫文庫にそれぞれ保存されている。

勝山町域について、正保四年（一六四七）作成の正保図（図5-7参照）を見てみると、「千二百七十石余 黒田」、「四百



図5—7 正保豊前国絵図（部分）  
 （正保4年（1647）、『福岡県史資料』第2輯所収）

十石余」、「三百三十石余長木」というように、各村ごとに村高と村名が記されている。そして、この正保図には、郡名・郡高・山の名・川の名・歩渡り・渡し（川幅と水深）・峠・台地・古城・島の名・船がかり・遠干潟などが書かれている。京都郡域の交通網に関しては、豊前大里と豊後府内（現大分市）を結ぶ「豊前道」（小倉道）が、主要道を示す赤い太線で引かれている。周防灘沿岸を東西に走る「豊前道」は、小倉と府内の城と城下町を結ぶ政治的・経済的・文化的主要道であった。

正保図では、主要道を

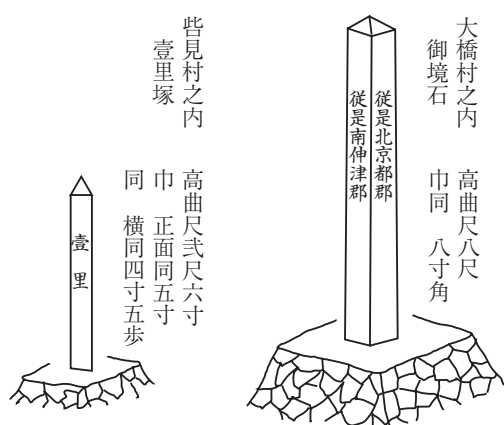


図5—8 御境石と壺里塚の復原図

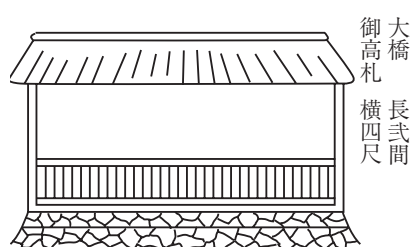


図5—9 御高札の復原図

示す赤い太線のほかに、村と村を結ぶ村道が赤い細線で引かれ、黒田村と上田村間に「九町」、行吏<sup>(事)</sup>村と伊与原村間には「一里山ヨリ伊与原マデ廿四町」などと、距離が打たれている。

寛永三年（一六二六）に新設された豊前国領内の一里塚は、この正保図では「一里山」と呼ばれ、里程の一里（約四<sup>あもうだ</sup>）ごとに墨星（…）で表示されている。勝山町域では、大谷—天生田（現、行橋市）間、新町—平尾間に、それぞれ一里山の墨星がある。

図5—8として「大橋御茶屋・御蔵所・御高札・御境石・壺里塚」（豊津高校小笠原文庫所蔵）の中から、「大橋村之内、御境石」、「些見村之内、壺里塚」、そして、「大橋御高札」の復原図を示して

おこう（図5—9）。

ところで、この正保図には、「七曲ヨリ上野マデ十八町」、「木部峠」などと、郡境を越える峠や「青龍窟」、「馬獄古城」、「松山古城」などと、古窟や古城も描かれ、細かく道路網が記されているが、いずれも道筋の呼称が入っていない。

京都郡域を貫流する河川で、名称が記されているのと、いないのがある。現在の長峡川は「大橋川」と記され、井尻川は描かれているが、名称が記されていない。そして「大橋川」には、豊前道の「行吏」（行事、あるいは行司）の地点で「歩渡り 幅甘間、深サ二尺」と墨書されている。このように「大橋川」（長峡川）には、当時、橋が架かっておらず、旅人は歩<sup>かち</sup>で渡河したのである。

### 元禄の国絵図

正保の国絵図の提出後、半世紀を経た元禄十年（一六九七）、幕府は、各国に国絵図を作成して提出するように命じた。

同十三年（一七〇〇）十一月二十六日、郡代役宿久喜右衛門正式・田川郡筋奉行鮎川角兵衛広盛、それに上毛郡筋奉行有山由左衛門寛利の三人は、幕府勘定所へ「豊前国絵図」を提出するために小倉を船で立ち、江戸へ向かった（『福岡県史』第三卷下冊）。

このとき、幕府に提出された、いわゆる元禄の「豊前国絵図」の控えが、福岡県立豊津高校小笠原文庫に所蔵されている。



図5—10 元禄豊前国絵図（部分）（小笠原文庫所蔵）

る。この絵図は、四<sub>レ</sub>四方の大きなもので、豊前国八郡（企救・田川・京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐）全域の各村ごとの石高・海岸線・河川・山・国境・郡境・社寺・名勝、それに主な道路などが丁寧<sub>二</sub>に記されている（図5—10参照）。

正保と元禄の二つの絵図の相違点としては、次の三点が指摘できる。

- (1) 二つの絵図を比較してみると、わずか五三年であるが、この間の村々の推移が分かる。元禄図では、宮原村から分離して浦河内村（一四二石余）が新村として独立、岩熊村から分離して矢山村（一七〇石余）が独立、上久保村から分離して新町（九五石余）が独立している。元和八年（一六二二）七月五日の「京都郡人畜御改帳」で、上久保村飛松分（一五六石二斗三升二合）とある、「飛松」は、正保図では散見されないが、

表5—27 正保図と元禄図に見る勝山町域の村名と村高の推移

| 正 保 図       |        | 元 禄 図        |        |
|-------------|--------|--------------|--------|
| 正保4年 (1647) |        | 元禄13年 (1700) |        |
| 黒田          | 1270石余 | 黒田           | 1141石余 |
| 上田          | 410石余  | 上田           | 379石余  |
| 箕田          | 520石余  | 箕田           | 557石余  |
| 長川          | 120石余  | 長川           | 314石余  |
| 宮原          | 450石余  | 宮原           | 310石余  |
| 宮原ノ内        | 浦河内    | 浦河内          | 142石余  |
| 岩熊          | 440石余  | 岩熊           | 274石余  |
| 岩熊ノ内        | 矢山     | 矢山           | 170石余  |
| 池田          | 470石余  | 池田           | 267石余  |
| 上久保         | 1000石余 | 上久保          | 782石余  |
| 上久保ノ内       | 新町     | 新町           | 95石余   |
| な           | し      | 飛松           | 110石余  |
| 中久保         | 70石余   | 中久保          | 74石余   |
| 下久保         | 200石余  | 下久保          | 200石余  |
| 菩提          | 190石余  | 菩提           | 194石余  |
| 御手水         | 140石余  | 御手水          | 143石余  |
| 図師          | 110石余  | 図師           | 112石余  |
| 上野          | 320石余  | 上野           | 329石余  |
| 下田          | 80石余   | 下田           | 88石余   |
| 平尾          | 200石余  | 平尾           | 203石余  |

元禄図では飛松村（一一〇石余）として独立村になっている。また、元和の人畜改帳で、黒田手永池田分（二六一石九斗四升五勺）とある、「池田」は、正保図では池田村（四七〇石余）として独立村になっている。

正保図と元禄図の郡ごとの石高では、仲津郡は四三一石、築城郡は五〇〇石、上毛郡は四二一五石、企救郡は二〇七七石、田川郡は三九二四石、それぞれ増加しているが、京都郡は七〇四石減少している。

交通網の点では、正保図は主要道のほかに、村と村を結ぶ村道の記載があるが、元禄図は主要道だけである。正保図では、椎田と山鹿を結ぶ主要ルートが、椎田―築城

―別府―国作―天生田―花熊―木山―山鹿のコースであったのが、元禄図では、椎田―築城―別府―吉岡―久富―八ツ溝―山鹿のコースになっている。つまり、椎田―山鹿間が最短距離のコースをとるようになったのである。

### 豊前小倉領全図

福岡県立豊津高校の小笠原文庫に、「豊前小倉領全図」が保存されている。図5—11は、京都郡と企救・田川・仲津郡の一部を復原した部分図である。

この領域図には、制作年代の記載がなく、いつ作成されたものか特定できない。

しかし、①図中に小祝・高浜の地名がみえず、直江が記されていること（慶応三年十二月四日、小倉領―正式には香春領―と中津領との替地が成立し、小祝・高浜が中津領となり、直江・土屋垣・別府の一部が小倉領＝香春領となる）。②分村の多くが独立村となり、「旧高田領取調帳」に掲載の村々と符合すること、などから幕末・維新期のものと考えられる。

この絵図の特徴は、慶長・正保・元禄・天保の四大国絵図と違って、街道と宿駅が呼称とともに具体的に記載されていることである。街道としては、中津道・豊後日田道・小石原道・大隈道・黒崎道が散見され、宿駅（人馬継立場）としては、八屋・椎田・荻田・大里・添田町・香春・呼野・徳力・猪膝町・山

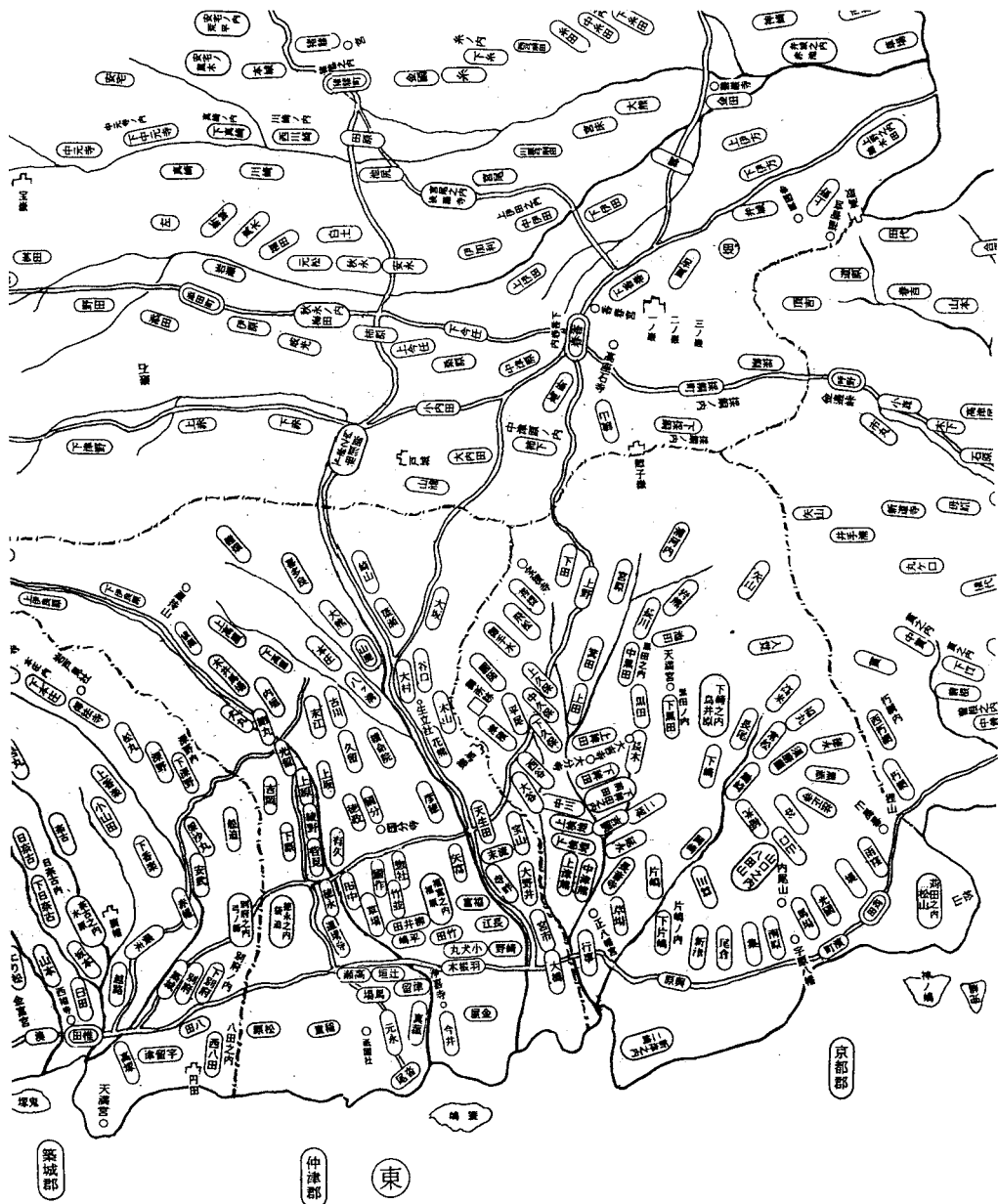


図5-11 豊前小倉領全図復原 (部分)

鹿が描かれている。  
京都郡境の街道としては、「中津道」が散見され、宿駅として「荻田」、道筋の地名として「濱町」・「與原」・「行事」が描かれている。そして、もう一つ、街道名は記載されていないが、いわゆる「香春道」が散見され、宿駅として「新町」の記載はないが、道筋の地名として「上野」・「上久保」・「中久保」・「下久保」・「西谷」・「大谷」などが描かれている。